

小さな草と太陽

小川未明

青空文庫

垣根の内側に、小さな一本の草が芽を出しました。ちょうど、そのときは、春の初めのころでありました。いろいろの花が、日にまし、つぼみがふくらんできて、咲きかけていた時分であります。

垣根の際は、長い冬の間は、ほとんど毎朝のように霜柱が立って、その地は凍っていました。寒い、寒い天気の日などは、朝から晩まで、その霜柱が解けずに、ちょうど六方石のように、また塩の結晶したように、美しく光っていることがありました。そのそばに生えている青木の葉が黒ずんで、やはり霜柱のために傷んで葉はだらりと垂れて、力なく下を向いているのであります。

けれど、春になりますと、いつしか霜柱が立たなくなりました。そして、一時は、ふくれあがって、痛々しそうに見えた土まだが、しっとり湿っておちついていました。元気のなかつた、憂鬱な青木の葉も青い空をながめるように、頭をもたげました。赤い実までがいきいきして、ちょうど、さんごの珠のように、つやつやしく輝いて見えたのです。

そのころのことでありました。垣根の内側に、小さな一本の草が芽を出しました。草

は、この世よに生まれうたけれど、まだ時節じせつが早はやかったものか、寒さむくて、寒さむくて、寒さむくて、毎まい日にち震ふるえていなければなりませんでした。

そのはずで、いくら、木々きぎのつぼみはふくらんできましても、この垣根かきねの内側うちがわには、暖あたかな太陽たいようが終しゆうじつて日照ひらすことがなかったからであります。

「ああ、いつになったら、お日ひさまが私わたしを暖あためてくださるだろう。」と、草くさはつぶやいていました。

すると、この言葉ことばを聞ききつけた青木あおきは、

「我慢がまんをしろ、我慢がまんをしろ、俺おれなどは去年きよねんの秋あきから、日ひに当あたらずにいるのだ。それでも黙だまって不平ふへいをいわないじやないか、我慢がまんをしろ、我慢がまんをしろ。」といいました。

草くさはこういわれると、小ちいさな頭あたまを上げあげました。

「だって、おまえさんは大おほきいじやないか、だから我慢がまんもされようが、私わたしはこんなに小ちいさいのだ。」と、うらめしそうにいいました。

けれど、もう青木あおきの木きはなんとも答こたえませんでした。そして、黙だまっていました。

草くさは、昼間ひるまは、まだ我慢がまんもできましたけれど、夜中よなかになりますと、寒さむくて、寒さむくて、震ふるえていました。そして、自分じぶんながら枯かれてしまわないかと、心しん配はいしたほどでありました。

そのうちに、日はたちました。小鳥がさえずって、頭の上の高い空を飛んでゆくのを、たびたび聞きました。

「いつになつたらお日さまは、私を照らしてくださいさるだろう。」と、草はつぶやいていました。

ある朝、草は、まぶしい光が、青木の葉にさしているのを見つけました。なんと美しい光だろう。草は驚いて、その黄金の溶けて流れたような光線を見ていますと、やがてその光は、赤い青木の実に燃えつきました。すると、さんごの珠のような実は、すきとおつて見えるように、美しかったです。草は、ただ、あ、あ、とため息をもらしているばかりでした。

けれど、それから、草に日の当たるまでには、また幾日か間がありました。ある日、草は、今日ばかに夜が早く明けたなと思つて、目を開きますと、長い間待ちこがれた太陽の光が、はや幾分か自分の体に当たっているのに気づきました。

草はこおどりをして喜びました。そのうちに太陽は、にこやかな円い顔で、頭の上のぞきました。

「お日さま、私はどれほど、あなたをお待ちしたかしれません。」と、草はいいました。

「ああ、そうだろう。俺は、休まずにやってきたのだが、それでもどんなにおまえに、待ち遠しかったかしれない。」と、太陽は、やさしく、草をなぐさめました。

その日から、草は太陽の光を受けて、めきめきと成長いたしました。一月ばかりの間に、どんなに草は大きくなったでしょう。そして、枝ものびて、つぼみもつけて、いまにも花を咲こうとしたのであります。

そのとき、太陽は、ふたたび屋根のあちらに隠れようと思いました。草は、日かげつたのに驚いて、太陽を仰いで、

「お日さま、また、どこへかいつてしまわれるのでございますか。」と、目をみはつていました。

すると、太陽はいつに変わらぬ、にこやかな顔をして、

「もうおまえは、それでだいじょうぶだ。りっぱに花が咲いて、実を結ぶことができる。まだ北の方に、俺を待っているものがたくさんいる。」と、太陽はいいました。

「だが私は、あなたにお別れするのが悲しくてなりません。」と、草はいいました。

「そんなに悲しまなくてもいい。俺は南に帰るときに、もう一度おまえを見るだろう。」と、太陽は答えました。

その後、草はたして、りっぱな花を咲きました。脊も、もつと高くのびて、青木よりも高くなりました。そして、葉もたくさんにしげりました。草は、内心大いに安堵していたのであります。もう、このくらい大きくなれば、太陽にすがらなくともいい、青木が冬の間我慢をしていたように、私も我慢のできないことはないと思ひました。

「青木の木さん、あなたはどんな花をお咲きなのですか。」と、草は、黙っている青木の木に問いました。しかし、憂鬱な青木は、やはり黙っていました。

こんな陰気な生活をして、なにがおもしろいのだろうと、草は青木のことを思ひました。青木には、みつばちもあぶも、ちようも訪ねてきませんでした。それにひきかえて、草には、朝から晩まで、ちようや、あぶや、みつばちが訪ねてきました。

「ほんとうに、あなたは美しい。」と、いつて、彼らは草をほめたたえていました。

草は昔のことをすっかり忘れてしまつて、夢を見るような気持ちでその日を送つていました。やがて、夏も末に近づくと、太陽はふたたび草の上に現れました。

「もう俺は南へ帰る。おまえともこれがお名残だ。」と、太陽は、いつになく悲しそうな顔をしていました。

けれど草は、そんなに悲しいとも思ひませんでした。青木の木より、俺は高いと心の中

で誇ほこっていたからです。しかし、太陽たいようが南みなみへ去さってしまつてしまつと、まもなく、草くさは枯かれてしま

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「赤い鳥」赤い鳥社

1920（大正9）年11月

※表題は底本では、「小《ちい》さな草《くさ》と太陽《たいよう》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小さな草と太陽

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>